

＜今日の説教のポイント ルカによる福音書1章5～25節＞
今年ルカが記し残したイエス様の誕生物語から聞いていきます。

1 ルカ福音書の降誕物語の特徴 — 神様の視点から語る。

ルカ福音書はイエス様の誕生の次第について一番詳しく記している福音書です。一番古いマルコ福音書には記されていません。受胎告知や処女降誕、星の導きなど信じられない出来事が一杯出て来ます。本当に起こった出来事というよりはお話、作られた物語ではないかと思うかもしれません。ルカ自身がこれを献呈するにあたり、「物語」という言葉を用いています(1:1-2)。しかしこの原語の意味は「詳しく語る」です。本当に大事なことを理解するためには、事実を羅列するだけではない物語するという手法があり、ルカはその手法を用いたのです。奇想天外な絵空事を書いているのではないのです(1:3-4でルカ自身が述べている)。

そしてもう一つ大事なことがあります。ルカは(マタイもヨハネも)神様の視点から記しています。これ抜きで読んだら訳が分からないで終わる話、しかし、私たちの思いを超えた神様の視点から、すなわち神様はどうしてそれをなされたのかを知りたいと思って読むとき、全ては筋が通ったものとして見えて来るのです。

2 神の前に正しい二人から学べること — 幸不幸の捉え方！

ルカがザカリヤ夫婦の物語から始めていることも、この神様の視点から考えると分かりやすくなります。イエス様を遣わすにあたり、神様がそのような方法を取られたということです。私たちに必要なことは、そこに込められた神様の意図を考えるということですし、それで十分なのです。①神様に仕える祭司、それも稀有な正しい祭司夫妻にヨハネが与えられた、②二人は高齢で子どもはいなかった、③その二人にヨハネが与えられた、④天使の告げたことを信じられなかったザカリヤは口がきけなくされたが、ヨハネが生まれた時に神を賛美した(1:63)、これらの内容を神様の視点から見っていく時に、その意味が見えて来るのです。

私はこの二人の物語を読んで思わされました、不幸だと思えることに一喜一憂する必要はない、何を幸いと考え不幸だと考えるかは人の目を気にすることではなく、私たちが造り愛し続けて下さっている神様とつながって生きる中で考えることなのだ。そう思うと、自分の様な者を赦し愛し続けて下さる神様を見上げて生きていける幸いを思うのです。神様が御子誕生に込めて下さった意味をさらに見つめていきます。